

<p>全体的な所感 (相談内容の 傾向) 特に気 になった点</p>	<p>〈体調の変化に伴う支援調整の増加〉</p> <p>本人の身体状態の悪化（体調不良、障がいの進行、怪我など）が原因で、ヘルパー等の福祉サービスを調整する機会が多かった。基本的には、障がい支援区分に応じて支給されている時間数や日数の範囲内で支援調整を行ったが、利用者の状態によっては区分の変更手続きを行い、生活を立て直すこともあった。</p> <p>自宅訪問や電話連絡等で早期に症状の変化に気付くこともあったが、普段より支援に関わっているヘルパー事業所や訪問看護等の支援者からの連絡により支援調整を図ることも多い為、常日頃からお互いに情報を共有し合える体制作りが必要であると感じた。</p>
<p>連携の取れた ケースや工夫 したケース等</p>	<p>〈福祉サービスの利用経験が無かった方への支援〉</p> <p>主介護者である母親が入院したことにより、在宅での生活が困難となった方のケースについて。母親の在宅復帰の目途が立つまでの間、ショートステイの利用を繋ぐ形で対応することになったが、福祉サービスを利用した経験が無かったこともあり、当初は施設生活に馴染むことができず、精神面で不安になったり、同室の利用者との関係が悪化してしまうことがあった。随時、ショートステイの担当者より情報を提供してもらい、必要に応じて本人と面談することで精神面でのサポートを図った。母親の退院時期が確定した際、以前の様に母親からの支援は望めないとの判断から、本人・母親・ケアマネジャー・（本人の）ヘルパー及び訪問入浴事業所・支援センターとで連絡を密に取り合い、在宅生活に向けた支援内容を整えた。各担当者が役割を明確にしたことで、福祉サービスに慣れない本人及び母親の在宅での生活に対する不安感の軽減に繋がった。</p>
<p>平成26年度の 予定</p>	<p>個々の相談ケースについて情報を共有し、必要に応じて意見交換をすることで、自らの支援方法を見直すきっかけ作りとしていきたい。それと同時に、他の障がい者生活支援センターとの連携を密にすることで、相談支援体制の充実を図りたい。</p> <p>基本的には本人又は家族からの相談に応じて支援調整を図っているが、「支援は必要だが、相談すると迷惑をかけてしまうのではないか。」との理由から、相談自体を控えている方もいる。特に相談自体を控えている方の場合、体調の変化に気付かずに、救急搬送等の急を要する支援調整が必要となる場合もあり、リスクも高い。そのことから、定期的な自宅訪問や電話での安否確認は勿論のこと、ヘルパー等の支援者、知人、近所の住民等からの連絡体制の確立が重要となってくる為、啓発活動にも力を注いでいきたい。</p>

<p>全体的な所感 (相談内容の傾向)特に気になった点</p>	<p>全体的にグループホームに関する相談が多い。現在、居住に困っている相談者もいれば、将来的にグループホームを利用したいと考えている相談者もいる。今できることとしてグループホームの見学や待機登録を勧めているが、グループホームの数が需要に追いついていない。</p> <p>当センターに指定特定相談支援事業所がある影響だと思われるが、計画相談に関する相談が多く、更新時にセルフプランの用紙が郵送されてきたがわからないという相談も多い。</p> <p>計画相談、セルフプランの周知不足を感じたと共に計画を立てられる相談員の不足が切実な問題となっているように感じた。</p>
<p>連携の取れたケースや工夫したケース等</p>	<p>〈医療、福祉、インフォーマルの連携が上手く取れ、亡くなるまで支援が行き届いたケース〉</p> <p>昨年、癌が見つかるまでは、支援の介入は難しい家庭であったが、治療が進むごとに多種の支援を受けれるようになった。病院側の協力もあり、障がいの特性から難しいと言われていた検査や手術も行うことができた。末期状態になった時も、最後まで自宅で介護能力のない母と暮らす為に、どう支援できるか、できるだけ多くの支援者と会議で支援を考えた。支援者皆が、同じ支援の方向性で自宅環境を整える準備体制ができた。</p> <p>本人亡き後も、当時関わった支援者で母の支援に今も携わっている。</p>
<p>平成26年度の予定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・毎年3月に春日台特別支援学校の卒業生と面談を行っている。今までは主に就労する生徒と面談をしていたが、去年度は福祉系の進路に進む生徒と面談をした。面談で終わりではなく、SOS発信が難しいと思われる家庭には、定期的に様子を伺い、現状確認をしていきたい。また、支援が途切れている相談者に対しても様子を伺い、必要な人に必要なサービスが届くように支援をしていきたい。 ・計画相談に関する相談に対して、現状では作成のメインがセルフプランになっている。ただセルフプランを市に提出するだけでなく、セルフプランで自分に必要な支援を明確にすることで当事者への理解を深めることを目標にしていく。 ・今年度から新体制になった。より一層、他事業所との連携を強化していきたい。

<p>全体的な所感 (相談内容の 傾向) 特に気 になった点</p>	<p>日中活動先での人間関係や将来への不安等で電話相談の件数が多かった。自閉症スペクトラムの特性がベースにあり、先の見通しが立たないことや、想像することが苦手なために起こると思われるトラブル、不安や焦り、猜疑心、被害感などが絡み合っており、他者との関係を悪化させているケースに対して、自分たちが伝えたいことをどう的確に伝えるかなど、試行錯誤と、関係者との連携が必要なケースが多くあった。</p> <p>また、地域包括支援センターや介護保険関係者からの相談も途絶えずある。合同での訪問やお互いの専門分野の力を出し合いながら、世帯を支援していくケースも増えている。今まで介護していた側の親世代が介護保険世代となり、障がい者自身がどうやって自立した生活を作っていくのか。サービスだけでは担えないことも多く、関係者の連携が重要になっている。</p>
<p>連携の取れた ケースや工夫 したケース等</p>	<p><地域包括支援センター、高齢福祉課からの依頼で在宅生活が安定したケース></p> <p>親御さんの件で関わっていた地域包括支援センターと高齢福祉課からの相談で、入院中の病院から退院に向けてサービス利用の準備を整えてきた。ホームヘルプサービスを自身が利用できるとは思っていなかったり、怠薬により病状悪化した経過もあり、服薬の大切さも説明し精神科訪問看護も導入を決め、無事に約2ヶ月後に退院できた。初めての1人暮らしだがヘルパー、訪問看護、クリニック、さらに2ヶ月で介護保険対象となり、地域包括支援センターやケアマネジャーも加わり、多くの支援者に支えられながら安定した在宅生活を送っている。</p> <p><4年越しでやっと障害年金申請に至ったケース></p> <p>以前から障害年金申請を関係機関から繋いでもらっていたケースがあったが、経済的に危機感がなく、時間だけが経過。昨年、親の老いをやっと自覚し、今後のことを考えるようになった。見た目はしっかりした人だったが、関係機関への同行や書類作成を一緒に進める中で、それまで知ることのなかった不安や焦り、パターン化された生活など、普段関わっている施設の職員も把握していなかった生活の大変さを知った。関係者とも連携をとりながら、少しでも不安の軽減に繋がるような支援を心掛けた。</p>
<p>平成26年度の 予定</p>	<p>地域での<休日の居場所・相談場所>として継続して来ていた「サボテンくらぶ」は平成26年4月の開催をもって毎月の実施は終了としたが行事的な開催をしてきた花火大会見物などは継続。ボランティアから始まった12年間の活動はいろんな学びがある活動だった。</p> <p>その他のグループ活動で「まねきねこ」「サンクチュアリ」は継続していく。</p> <p>4月から鳥居松町に移転し、常勤の相談員の交代はあったが、今のところ大きな影響はなく過ぎている。相談支援事業所連絡会での事業所間研修や各種研修に積極的に参加し、顔の見える関係作りやスキルアップをしていく。</p>

<p>全体的な所感 (相談内容の傾向)特に気になった点</p>	<p>年度が変わるこの時期は、園や学校での環境が変わり、それに関する相談が増える。年度末は、子どもが新しい集団に馴染めるかどうかなど保護者の不安が大きくなる時期でそういった相談が増える。また、年度始めは園や学校での実際の生活が始まって、集団生活に馴染めず落ち着きがない、一斉の指示が入りにくい様子があるなど、子どもの困り感についての相談が多くなるように感じる。年度始めのこういうケースでは、保護者自身が子どもの障がいのことなど思ってもみななかった場合もある。子どもの困り感を保護者から丁寧に聞き取り、子ども自身へよりよい援助が届くように相談支援を行っていくことが大切だと感じている。</p>
<p>連携の取れたケースや工夫したケース等</p>	<p><園、子育て支援施設、児童発達支援事業所との連携></p> <p>困り感のある子どもについての支援を話し合うため、保育園・幼稚園へ行くことがある。園の先生の現場での困り感を聞き、支援の方向性を話し合っている。また、子育て支援施設や児童発達支援事業所へ直接行き、周知を図ってきた。顔の見える関係を少しずつ築き、子どもの支援に関して話をしたり、支援者が複数関わることでのよりよい支援を考えている。</p> <p><保護者が子どもの対応に困り、試行錯誤しているケース></p> <p>学校へ行きたがらないという子どもの発言や行動に保護者が困り、試行錯誤して相談があった。このケースでは、生活状況を丁寧に聞き取り、保護者の困り感と子どもの困り感を分けて考えることを大切にしている。そうすることにより、相談者自身が支援の方向性について明確に考えることができていった。</p>
<p>平成26年度の予定</p>	<p>相談は、子育てのことから、発達の障がい特性についてなど幅があり障がいありきの相談ばかりではない。そのため、相談者ができるだけ相談しやすいよう「子育て」という観点からの相談支援を考え、子育て支援センターほか、地域の子育て支援拠点も訪問し周知を図っていきたいと考えている。</p> <p>また、児童発達支援事業所や放課後等デイサービス事業所へも出かけ、障がい者生活支援センターの周知を図りたい。事業所訪問の際にはそれだけでなく福祉サービスを利用している現場の子どもたちの状況や保護者の状況を聞かせてもらい、春日井市の障がい児支援について求められていることを改めて考えていきたいと思っている。</p>

<p>全体的な所感 (相談内容の 傾向) 特に気 になった点</p>	<p>障がい種別相談の割合(身体13%、知的32%、精神42%、児童3%、重複10%)を見ると、精神障がいの割合が最も多く、中でも新規相談では、家族相談の割合が多かった。福祉サービスや医療に繋がっていないケースもあり、事態が深刻化してから相談に至ることもある。早い段階での相談に繋げていくため、相談窓口の周知徹底と機能強化の必要性が感じられる。</p> <p>全体的な相談傾向として多数を占めているのは、生活保護に関わる相談であり、次いで住まい(入所施設探し等含む)の相談となった。これらは重複しているケースもあり、親の高齢化や病状の悪化など何らかの理由で支援を継続できなくなった家族等がその後の支援先を見つけるための相談であることが多く、支援を継続できなくなる前に相談・支援に繋げていく必要性を強く感じた。</p>
<p>連携の取れた ケースや工夫 したケース等</p>	<p>〈支援拒否の状態から、本人の意欲の向上に繋がったケース〉</p> <p>転倒により入院した身体障がい者のケース。今後はリハビリ病院への転院も考えられたが、本人が支援を拒否したため、在宅での生活に戻ることとなった。</p> <p>しかし、自宅でも入院時同様の支援拒否が続き、何も出来ていない状況であったため、病院ケースワーカーや親族、近隣住民、ヘルパー事業所と今後の対応を検討し、本人の困り事を切り口に、意向を踏まえながら信頼関係を構築していった。その結果ヘルパーの導入や宅配弁当の利用に繋げることができた。現在では、本人も意欲が出てきており、自発的な行動も見られるようになってきている。</p>
<p>平成26年度の 予定</p>	<p>①基幹相談支援センターの開設に伴い、相談支援体制の機能強化のため、スーパーバイザーを迎えた。また、関係機関との連携を強化し、幅広いニーズに対応できるネットワークの構築に努める。</p> <p>②虐待の早期発見・早期対応ができるよう、障がい福祉課と共に再度、虐待防止体制について確認・整備をしていく。また、虐待防止センターの周知及び、虐待防止の啓発に努めていく。</p>